んとされたものである。その何が故に特にこの四帝を擧げられたかはもとより外的なる機緣によるものあるとはいへ、いづれもわが國歷史の時代の最も重要なる轉換期に於て、一は攝關政治を斥け、他は武家政治を排して共に朝家の政權を確保せんとし給うた處、一脈相通ずるものあるを思ふならばその本書の主題に於て決して偶然ならざるを知り得るであらう。四帝は雪にその立たせらるゝ歷史的シィテュエィションに於て相似るのみならず、相互に時を隔てゝ一貫した脈絡の糸に繫がれ給ふ、而してその先は當然後醍醐天皇に結ばれねばならぬ。實に後鳥羽院の後その先蹤が如何に後代に繼承せれたかの問題はこの書に於て就中力を致されたところである。それが爲にまづ春日神社文書の內一通の假名消息を後鳥羽院の宸翰なるべしと斷じてその文意の奧にひそむ院の聖慮を窺ひ、また新に水無瀨宮所藏の文書を精査してその中に後村上天皇宸筆の御願文を見出で、それによつて從來多くたゞ憶測の範圍を出でなかつた南朝に於ける後鳥羽院御憧慕の事實を立證せらるゝなど實に著者にして始めて能くしうる所であらう。

かくてこの書は、その公刊の裏に現下の時勢に對する著者の大いなる關心の認めらるゝものがあるとはいへ、それ單に多くの類書に見るが如き立證の手續を經ざる敎說と異り、歷史家として要請せらるゝ最も嚴密にして眞摯なる考證の結果に基いてゐるのである。然もその考證を一貫して、皇覇の隆替纒綿も遂には皇道の勝利に歸するを以てわが國史の眞髓なりとする大いなる確信の存するところ、人をして自ら神皇正統記を思はしむるものがあり、歷史の中心を個人に求めその意欲の因果の上に時代推移の理を探れんとせらるゝ所、また多く親房の歷史觀に通ずるものがあるといひ得よう。實にこの書は、新しく詳述せられた神皇正統記である。（本文四一〇頁、口繪四葉、東京賢文館發行　定價三・五〇）（柴田）

◉南學史　寺石正路著

日本近世の學問史上に於て其古き傳統と獨特の學風と其顯著なる史的活動とによつて、山口の西學、薩摩の薩學、京都の京學と並稱される土佐の南學の歷史を得た事は我々にとつて非常な喜びである。鄕土史研究の旺盛となつた事は歷史研究の發展の一面であるが、此處に一地方を中心とした學派の歷史が鄕土史の大家として其地の史實に通曉せらるゝ寺石氏によつてなされた事は斯學發展の上に更に強き意義を持つものである。

本書に於ては日本上古の儒學及び宋學の概說に始り、それが中世五山の禪寺內で育てられた事情に及んで夢窓、義堂、絕海が說かれ、高知吸江庵の文化的位置が明にされる。かくて其學統の流に從つて近世に入つて谷時中、野中兼山、山崎闇齋等輩出の盛觀に至り、更に谷秦山を經て山口菅山、佐藤一齋の土佐人との關係に亘つて說かれてゐる。此の間地理的關係を詳しくし其人物傳記學統を微細な點まで考究され、他の地方との關係及び近世思潮全般との連絡結合等南學の學派的位置を鮮明にされてゐる。次で一條家の流を引く幡多文學等の地方文化に說き

及され、最後に明治維新に於ける活動に至つてゐる。日本精神が問題となり、明治維新が批判の對象の隨一となれる今日、著者が南學を說いて維新の際の人材の活動に至り、此處に南學の傳統影響功績を力說された事は、序文に於て人材の養成を强調された事と共に又意味ある事であらう。

只我々は本書に於て學說そのものゝ發展變遷や、それの背後にあつてそれを然らしめる社會的原因等に觸れらるる事の少い事に淋しさを感ずる。ともあれ本書の出現が我國思想史研究上に貢獻する所は我々の贅言を要しないであらう。(菊判本文一二八三頁、富山房發行、定價六・五〇〇岩城)

●神ながらの道　筧　克彥　進講

本書は最近まで東大法學部の講壇に立たれつゝも神道の研究に於いて嚴然たる存在を示して居られた筧克彥博士が、大正十三年二月より五月迄八回に亘り、當時の皇后陛下卽ち只今の皇太后陛下の御前に於いて進め奉りし講演の速記を補修せるものである。既に去る大正十五年一度制剛に附せられてゐたが今全く裝を新にし、菊版六百八十頁白クロース張りの清楚なる形を以て再び上梓公刊の運びに至つたのである。

博士は神ながらの道とは心の道であり、人間として人間を超越し、日本人として日本人を超越しつゝ有する心の道、卽ち天地と一致したる人間、人間その儘の日本人として有する理想信仰であるとされる。而してその心の修養の爲めには、第一に皇國體を尊重し、第二に神社によりて神々を尊信し、第三に神典を介して祖先の純粹なる理想信仰に一致し、その理想信仰を分析して自覺に迄高めねばならぬと主張される。この三つの方法の內、本書は第三のそれを問題となし、博士一流の敬虔なる態度と方法とを以て神典を分析し、我國建國の理想信仰を解明し更にそれを現代日本の持つべき自覺として提示されてゐる。博士の所謂神典とは古事記、日本書紀、祝詞、古語拾遺、諸國の風土記、萬葉集、更に舊事本紀等を包括するもので、これらの諸文獻の內に神ながらの心を究明されんとしたのである。

かくて別天神並に神世七代の神々、神代本紀、彌榮の三段に分れる尨大なる神ながらの道の體系が組織されてゐる。

しかしながら博士の抱持せられる高遠なる理想と、博士一流の論理の展開とは、未だ博士の學問に親近する機を持たぬ吾人にとつては遺憾ながら理解に困難なる多くの點を藏してゐる。しかも猶我々は、我々の生活するこの時代に於いて、本書再版の意義を深く考へさせられるのである。換言すれば純粹に歷史學的であるよりは、むしろ時代の流と共に强く叫ぶものがあると考へる。

後世の人、もし現代の一思潮を考究せんとする場合には、本書は正にその神典たるの存在を誇るであらう。こゝに我々はこの書の持つ現代史的意味を明確に會得する事が出來るのである。(菊判六八〇頁、岩波書店發行、定價四・五〇〇)

●史料大成　鹿苑日錄の印行

近時國史學界に於いて、再檢討再批判が力强く提唱されつゝ